

暴力の是認と道徳の起源

田村 均 (名古屋大学大学院文学研究科)

1. はじめに

本発表は、暴力を是認する言説が道徳の起源である、と主張する。ここでの「道徳の起源」とは、ある行為を普遍的に推奨または禁止する言説の始まりを言う。この意味では、集団生活を可能にするヒトと類人猿に共通の心理的諸特性は、道徳の基盤であって起源ではない。本発表は、この諸特性を基盤とした上で、そこに何が付け加わるとヒト特有の道徳的思考が生まれるのかを問い、暴力の是認が道徳的思考の発生を成す、と主張する。

1.1. 【本発表の背景】 本発表は、現代の道徳哲学への一つの疑問を背景にしている。この一つの疑問は以下の三つの形で述べることができる。

- (1) [権力の無視] 権力 power を考慮に入れない道徳理論は、ヒトの社会生活の重大な要素を見落としている¹。
- (2) [個人主義の誤謬] 西洋近代の道徳哲学では、あたかもすべての支配が自己支配に帰着するように語られるが(例えば、カント主義や功利主義)、それは事実の誤認である(田村 2008; 同 2010)。
- (3) [現代行為論の不備] すべての情報が個体の中で欲求と信念という形式で処理され、その後、その個体の判断にもとづいて身体運動が帰結する、というヒトの行為の説明図式は(デイヴィドソンの図式)は、ヒトの社会性を取り扱いきれないという欠陥がある(田村 2010)。

1.1.1. 【本発表の主題】 人を外側から動かす権力に着目して道徳哲学を考え直す。人を外から動かす力の典型は暴力である。暴力は権力の核心にある²。以下、まずヒュームを援用して権力と暴力を定義する。次いで、道徳の起源を問う視点を明らかにし、本発表の主張の概略を予示する。

¹ フーコーの「生 - 権力 bio-pouvoir」という考え方は、権力が行為主体の身体に媒介された内的過程を経由して作用する西洋近代の仕組みを分析するための概念である(フーコー 1986, 180)。こんな微妙かつ迂遠な作用過程だけが権力作用であるわけではない。フーコーも指摘するとおり、もっとむき出しの権力がいくらかでもあったし、またあるだろう。

² 「すべての国家は力 force の上に築かれている」とトロツキーはブレスト・リトフスクで言った。これはまさに正しい。暴力の使い方を知る社会組織が一切存在しなかったら、「国家 state」という概念は廃絶され、その言葉の特別の意味において措定される「アナキー anarchy」が出現するであろう。(Weber 1970 [1918/9], 78)。

「国家自体が組織された力 force 以外の何だということか? 17世紀には、政治理論家はあからさまに力 force と権力 power という言葉によって語った。私たちはもっと礼儀正しい言葉遣いを発明した。現今では、一般意志や一般意識について多くのことが語られている。国家は道徳的な人格として、あるいは少なくとも法的な人格として出現する。私たちの言葉遣いが感傷的に礼儀正しくなったのにつれて、私たちの思考は明晰さと確定性を失ったのではないか。(Dewey 2009 [1916], 11)」

「人間の人間に対する攻撃性、暴力性は、われわれ文明の進歩のただ中において露わになり、その危険は進歩とともにむしろ増大していくように思える。それは現代の中心問題とすらなってしまった。……より深い次元で確認されることは、人間社会の秩序や支配形態がすべて制度化された暴力を基盤としている、ということである。(ブルケルト 2008, 9)」

1.1.2. 【権力 power のヒュームの定義³】

権力とは、或る個体の意志表示に従って別の個体が行為するときの、その行為の原因である。

1.1.3. 【暴力の定義】

暴力とは、権力〔すなわち、或る人の意志表示に従って、別人が行為するときの、その行為の原因〕が身体への物理的接触を伴って作用し、かつ、その身体への接触が、それを被る者の意に反する場合の、その身体への物理的接触のことである。

1.2. 【道徳起源論の問題構成】 本発表が扱うのは、類人猿の心理的傾向からヒトの道徳的思考への転回点がどこにあるのかという問題である。(de Waal 1996 ; ド・ヴァール 1998 ; 内井 2009)

内井 2009 は、若いチンパンジーの振る舞いに言及しつつ、次のように言う。

「倫理の観点からは、賞罰による行為の規制ではなく、そういった〔振る舞い方の〕規則が内面化されて、賞罰が(個々の行為に必ずしも)伴わない場合でも行動が規制されるということが本質的なのだ、と論じられるかもしれない。(内井 2009、202-3)」

規則の内面化の程度の違いを明らかにするという問題は、制裁と報償を通じた単なる規則遵守(仕付けられたイヌの自律性)と、規則に従うかどうか自ら決める自律性(人間的自由)の違いをどのように特徴付けるかという問題である。人間の道徳的な思考は、後者の意味での自律性(以下「道徳的自律性」と言う)を要件とする(Hare 1952, 13-16)。

道徳的自律性は、一般規則、及び一般規則について判断する個体、の二要素から成る。本発表では、一般規則が生じる自然史的状况と、そこに関与する心理的機能が何なのかを問題とし、個体の問題は取り扱わない。

あらかじめ本発表の立場を述べておけば、道徳の一般規則が作り出されるのは、或る状況における最善の選択肢を発見するという知的な働きによってではなく、或る状況において自分より上位の権威者の指示に服従するという社会的な働きによってである。言い換えれば、知性ではなく、服従によって一般規則が作られる。

なお、類人猿の行動からヒトの道徳へ到る過程を問うとは、自由平等の個人に基づく道徳的思考へと到る過程を解明することではない。ヒトは支配・被支配の関係に基づく階層社会を構成する動物である。過去の文明はすべて階層制(hierarchy)と全体論(holism)の上に築かれた。西洋近代文明は例外である⁴。例外の起源は思想史にゆだねる方がよい。

³ 「一方の対象が他方に運動や作用を生み出す場合だけでなく、単にそれを生み出す力(power)を有する場合にも、二対象が原因結果の関係で結合されている、と言ってよい。そして、これが、人々がそれによって社会においてたがいに影響し合い、支配と服従の絆で結ばれるところの、すべての利害と義務の関係の源である、と言ってよい。「主人」とは、力(force)または同意によって生じるその地位のゆえに、「しもべ」と呼ばれる他者の行為を、特定の点で指図する力(power)を持つものである。……人が何らかの力(power)をもつとき、それを行使するのに必要なのは、意志の実行(the exertion of the will)のみである。(Hume THN, 1.1.4.5)」

⁴ 「大多数の社会は、第一に、秩序(order)に価値を置く。秩序とは、社会のあらゆる要素がその社会におけるその役割に一致すること(conformity)である……これを私〔デュモン〕は全体論(holism)

1.2.1. 【Kitcher 2006 について】 類人猿からヒトへの移行の問題は Kitcher 2006 も取り上げる。キッチャーは、「私たちは〔アダム・スミスの〕公平な観察者 (またはそれと同等の者) を必要とする。(Kitcher 2006, 127)」と述べ、「〔道徳への〕歩みは、ある形での振る舞いが不都合な諸結果をもたらすことを自覚的に予測することと、これに随伴して、予測がなければ優先されたはずの欲求を抑制する能力とによって、始まったのだろう。(同 136)」と述べる。

1.2.2. 【本発表と Kitcher 2006 の違い】 本発表は、この問題にキッチャーとは逆から答える。キッチャーは、不都合なことが起こりそうだから自分の欲求を抑圧する という働きを重視する。本発表は、好都合なことが起こりそうだから自分の欲求(嫌悪や恐怖)を抑圧する という働きを重視する。そして、要請されるのは「公平な観察者」ではなく「不公平な権力者」である。

1.3. 【本発表の骨子】 道徳の形成に関与すると想定されるヒトの能力ないし傾向性を挙げる。これらによって一般規則に従った振る舞いが可能になる。[...] 内は心理学的発達課題である。

- (1) 【共感の拡張】 類人猿より広い範囲で他個体の心を洞察し共感する能力。[コミュニケーション能力一般 (共同注意 joint attention、情念・信念帰属)]
- (2) 【互酬性の拡張】 類人猿より広い範囲に互酬的な関係性を見出す能力。
- (3) 【虚構の設定】 記号的 (虚構的) な表出と解釈の能力。[フリ pretence、誤信念帰属]
- (4) 【序列関係の教育的拡張】 上位者の教示に服従する能力。[マネ、社会的参照]

これら四要素により、以下のようにして道徳的な判断の枠組みが作られる。すなわち、

- (1') 【共感の拡張】 ヒト以外の動物に仲間として共感を抱く傾向が生じる。
- (2') 【互酬性の拡張】 仲間 (動物) を殺して利用すると相手の身内からの復讐を招くという恐怖が生じる。
- (3') 【虚構の設定】 狩りの獲物として動物を殺す際に、相手または相手の守護者 (精霊) からの同意や許しを得ているという虚構を設定する。
- (4') 【序列関係の教育的拡張】 虚構の力 (精霊) の下で、上位者 (シャーマン) の教示に服従して行為する。

(1') ~ (4') により、誰が死んで誰が生きののかを語る神話的な秩序が形成され、人々がその語りに沿って行為を統御するようになる。この物語の下で嫌悪や恐怖を抑え、動物殺しと動物利用が可能になる。こうして、自らの暴力行使を正当化する枠組みが形成され、一般規則に立脚した道徳的思考が可能となる。

2. 西洋哲学史一瞥

西洋哲学史上、道徳の起源については二系統の考えがある。第一は、神に基づく自然主義で、

と呼ぶ。他方、その他の社会は とにかく私たち〔西欧〕の社会は 第一に、個々の人間に価値を置く。……世界がこれまでに知った偉大な諸文明のなかでは、たまたま全体論的な社会類型が圧倒的に支配的である。事実、それは法則であるかのように思われる。だが、唯一の例外は、私たち〔西欧〕の近代文明でありその個人主義的な社会類型なのである。(Dumont 1977, 4)

これは近代では自然法思想と呼ばれる。その典型はジョン・ロックであり、遡ればアキナス、パウロを経て、プラトンに至る。自然法の実質を捨てて形式のみ残せば、これはカント主義になる。第二は、神を持たない自然主義である。典型はヒュームであり、源はさておき、下ればダーウィンを経て現代に至る。

2.1. 【ジョン・ロック：『人間知性論』(1689)：神の命令に従う義務倫理と功利主義的倫理との一致】 以下の引用箇所、ロックは自然法と個々人の利益が一致すると述べている。義務論と功利論の歴史的出自は同じなのである。

「……道徳性の真の根底とは、神の意志と法とのみであって、神は暗闇の中で人を見ており、賞罰を手にして、どんな不遜な違反者をも弁明のために召喚する権力をもっているのである。さて、神は、徳と公共の幸福とを不可分に結びつけ、徳の実践を社会の維持に必要であるとともに、徳ある人と関係を持つすべての人に目に見えて利益となるようにしたので、すべての人が、それを守れば自分の利益が手に入れられるような規則を、たんに受け入れるばかりか、他人に向かって推奨し、褒め称える、ということになっている……道徳規則を利害に結びつけても、それらの規則が明らかに備えている道徳上の永遠の義務は少しも損なわれない。(Locke EHU, 1-3-6)」

2.2. 【ジョン・フィニス：自然法思想の歴史】 以下は、現代の自然法論者ジョン・フィニスによる自然法思想の歴史的な要約である。フィニスは自然法思想の源流をプラトンに求める。

「人々の意見や行為は多様であっても、正しい行ないの真にして妥当な諸規準は存在する、という主張は、哲学的にはプラトンによって、よく考えぬかれた批判的なやり方で明確化された。…人の欲求は、知識や友情を求める知性的な欲求であれ、美食やセックスや権力や評判を求める情緒的な欲求であれ、自然本性として、理性の諸規準によって支配され、節度あるものとされる必要がある。……私たちが、貪欲な暴君を悪い人間であり、一つの失敗であり、それゆえ邪悪でもあると判断する規準は、自然の正しさ、自然の法 (*natural right, natural law*) なのである。懐疑論者の言う「自然の法 (*law of nature*)」は、見かけは邪悪な誘引力があるが、理性的でないがゆえに反自然的 (*unnatural*) である。これがプラトンの『ゴルギアス』、『国家』、『法律』その他の作品のテーマである。

……この〔プラトン以来の〕伝統の或る主要な部分は、確かにロックやカントやヘーゲルの著作にも現れている。ただし、実践理性に関して彼らは懐疑論にひどく譲歩してしまったので、彼らの理論はもはや古典的とは呼ばず、「近代的 (*modern*)」と呼ぶしかない。……重要かつ根本的なあり方において、「近代的」な考え方はプラトンの洞察からの後退であり、ソクラテス以前の哲学者やソフィスト達の方への逆行である。(Finnis 2002, 3-4)」

フィニスは自然法思想の特徴を3つ挙げる。これは西洋倫理思想の保守本流の枠組みである。

1. 「自分は何を為すべきか? What should I do?」に答えることが目的であり、自分が何を為すべきか、慣習 (社会的事実) ではなく理由にもとづいて判断することに関心をもつ。
2. 「べし (*ought*)」を「である (*is*)」から導くことはできない。道徳と自然法は、自然科学・形而上学・論理学・テクノロジーの諸原理に還元できず、そこから導出もできない。

3 . 人格的個人 (persons) は、理性未満の生き物 sub-rational creatures から根源的に区別される。このような存在として諸個人は平等であり、人権をもつ。

2.3. 【『ゴルギアス』の示唆】 『ゴルギアス』では、最強の権力者でさえ、知者（医者や哲人）に教えてもらうことによって、はじめて自分が何をなすべきかが分かる、と語られる。行為者自身の力ではなく、むしろ、権威への服従が一般規則に従った行為を実現する……

2.4. 【ヒューム：非自然法的道徳論】 「〔人為的な徳である〕正義は、ただ単に人類の善に貢献する傾向をもつから道徳的徳なのであり、実際、この善を目的とする人工的な発明物にすぎない。（Hume, THN 3.3.1.9）……〔自然な徳に関わる〕諸性質は人類の善に貢献する傾向のゆえに我々の賞賛を獲得する、と推定してよいだろう。この推定は、我々の自然に肯定的に評価する諸性質が実際にこの傾向を持っており、人を社会の適切な成員とするものであることを見出すとき、また、我々の自然に否定的に評価する諸性質が反対の傾向を持っていて、その人物との交渉が危険だったり不快になったりするとき、確実なものとなる。（Hume, THN 3.3.1.10）……道徳的区別〔善悪〕が、多くの場合社会の利益に貢献する傾向をもつ諸性質および諸性格から生じており、これらへの肯定的評価や否定的評価を行わせるのはその利益への我々の関心である……我々は社会へのこれほど広範な関心を、共感以外から得ることはない。（Hume, THN 3.3.1.11）」

2.5. 【ダーウィン：ヒュームの継承】 「いかなる動物にせよ、はっきりとした社会的本能をそなえているならば、その知的能力が人間と同程度あるいは近い程度にまで発達したとしたなら、必ず道徳感覚あるいは良心を獲得するにちがいない。（Darwin, *The Descent of Man*, 1st edition. pp.71-2. 内井惣七 2009 『ダーウィンの思想』 p.167 の引用より）」

2.6. 【シュネーウィンドのヒューム解釈：自生的秩序としての道徳】 「……自然法論は、道徳法と人間にとっての善が一致することを説明するために神の知恵を持ち出し、義務の本性を説明するために神の命令と賞罰を呼び出している。ヒュームは、私たちのいるこの特定の世界において、私たちが一緒に生きていくことに自然に適合しているのはどのようにしてなのかを理解すれば、超自然の絵解きなしに済ませることができると論じている。……私たちは、有徳であるために必要な動機を自然に備えていて発達させていくのであるから、賞罰の必要はない。……私たちに共通の人間本性が、私たちみなを自己統御させる (self-governing) ののである。（J. B. Schneewind. *The Invention of Autonomy*. Cambridge University Press. 1998. p.369）」

3 . 暴力と道徳

神を持たない自然主義の弱点は、自然法思想が「神の命令」として語る普遍的な推奨や禁止を語りえない点である。ヒトの道徳性は、自然な傾向性の非自覚的な流露にとどまらず、自覚的で普遍的な命令の形式も持つ。すると、神を持たない自然主義の立場から道徳の起源を説明したいなら、自覚的で普遍的な命令が求められる局面をヒトの生活に見出し、神々をヒトの自然史に還元すればよい。以下、それを素描する。

命令は強制力の発動の一形態で、強制力の典型は暴力である。暴力が出現するとき、命令は物理的な形でそこに姿を現す。ヒトにもチンパンジーにも見られる暴力現象は、ケンカ（序列争い）や戦争（集団間抗争）であり、ここに潜む命令は「汝死すべし」である。だがチンパンジーは言

葉無しに暴力を振るい、激昂したヒトは言葉を失って暴力に及ぶ。これらの暴力は言葉による命令の自覚を必ずしも求めておらず、道徳の起源には足りない。

「汝死すべし」が作動するもう一つの状況として、動物殺し、つまり狩りがある。ロット＝ファルク、ブルケルト、ヴァレーリ等の報告によると、狩猟民は動物殺しを忌み、その責任を回避する傾向をもつ。動物は彼らの仲間であり、仲間殺しは相手の身内の復讐を招く危険な行為だからである。他者への共感や互酬性の認識の発達で、ヒトに動物殺しを忌避させる。だが他方、ヒトはチンパンジーと同じく肉食を好み、肉への欲望をもつ。ヒトは、仲間は殺してはならないが殺さなければ肉は得られない、という欲望の相反の下にある。この相反はチンパンジーの狩りには無い。

狩猟民は、動物の自己犠牲の物語や森の主霊が肉の利用を許すといった説話を持ち、この神話的虚構の中で動物殺しを正当化する。原初の動物殺しの中で、相反する欲望の上位に非現実の力が仮構され、その力が「汝死すべし」の命令を与える。人々は、この命令の下で死すべき者を殺すとき、初めて自らの暴力行使に正当性（権威の裏付け）を発見する。こうして仲間殺しを是認する虚構の力に服従するときに、ヒトは理念の水準で行為し始めるのである。

以上のように、暴力を是認する虚構の言説の中から、普遍的命令に従う道徳というヒト特有の営みが生じてくると考えられる。

3.1. 【ヒューム的な考え方への疑義】 上のシュネーウィンドに沿って言うと、(A)「私たちが一緒に生きていくことに自然に適合している (Schneewind 1998, 369)」ということと、(B)「私たちに共通の人間本性が、私たちみなを自己統御させる (self-governing) (同)」ということとは、違うことである。 (A) は、ヒトが社会性の動物として進化してきた、ということであり、この主張は正しい。だが、(B) には二つの意味があり、その片方は間違いである。

3.2. 第一の意味 (B₁) は、ヒトはみな、動物として (社会性動物として) 自分の考えで自分の身体を動かす (spontaneity: 自発性) ということ。これはそのとおり。第二の意味 (B₂) は、ヒトはみな、自分で自分を適切に統御 (支配) して社会を形成する ということ。これは経験的に間違いである。犯罪と処罰の事実を照らせば、個々のヒトに対する外からの強制、つまり賞罰によって社会は成り立っている。私たちは、社会性の動物として進化してきた (A の肯定) もとより自分の身体を自分で動かすが (B₁ の肯定) 外からの強制無しに社会が形成できるわけではない (B₂ の否定)。道徳を自生的秩序としてとらえるヒューム的道德論は、(B₁) と (B₂) の違いを曖昧にすることによって西洋近代の個人主義的道德観に適応している。

3.3. 【自然な暴力：ケンカと集団抗争】 権力は、xの意志がyを動かすときの力であり、暴力はこの力が物理的接触を介して作用するときの接触のことである (1.1.1&2)。ケンカと集団抗争という暴力現象に関して、チンパンジーとヒトはよく似ている。従って、この二つの暴力現象から、ヒト特有の権力行使システム (つまり道徳的思考) が生まれたわけではない、と推定される。チンパンジーが言葉なしでやることは、ヒトも言葉なしでやれるだろう。だから、ここからヒト特有の道徳的思考が生まれはしないだろう、ということである。 [田村の推定]

3.4. 【狩り】 狩りは動物殺しである。ヒトは狩りへの適応によって進化した といつかつて

の仮説は、今はほぼ却けられている。肉食はヒトの進化に大きな意義があったとされるが(ランガム 2010、7-8) ヒトの祖先が肉を得た方法は屍肉あさり(scavenging)その他のやり方だったらしい(Jones *et als* (eds) 1992, 366)。ヒトの組織的な狩りの始まりを示す考古学的に確かな証拠は、かなり最近(遡っても40万年前⁵)のものしか無い。「事実と化石だけに目を向けると」……狩猟の兆しが現れるのは驚くほど最近のことだとわかる。『ケンブリッジ人類進化百科事典』によれば、大がかりで組織的な狩猟があったことを示す動かぬ証拠とできるのは、おそらくわずか6~8万年前の遺跡から出てくる遺物である。(ハート&サスマン 2007、306)」

3.4.1. チンパンジーも狩りをする。それは意図的な狩りではなく、野外観察によれば、たまたま遭遇した動物を捕らえ(Stanford 1999, 48) 生きたまま引きちぎって食べるのである(グドール 1990、297)。彼らには動物殺しを厭う感情は無いが、希薄なようである。だが、ヒトには暴力的性向とともに、動物を殺すことを嫌う感情もある。「狩猟と殺しへの欲望が人間の本能なら、それは奇妙にも限られている。ほんの12%のアメリカ人が狩猟をし、その数は毎年減少している。(カートミル 1995、356)」

3.5.【狩猟民の習俗】 狩猟民は、動物を仲間と感じ、仲間殺しの罪責を免れたいと考える。この心性は広く確認されている。狩猟民にとって、動物殺しは精霊を怒らせる神聖冒瀆であり、極力避けたい危険な業務である。狩りを安全に行なうためには、守護霊に許可を求めたり、動物霊を宥めたりしないといけない。動物殺しをめぐって、ヒトは原始の宗教的思念(シャーマニズム)を発達させたい。この思念の中で、人間と動物は互酬的(reciprocal)関係で結ばれる。

3.5.1. シャーマニズムは、「優に後期旧石器時代[Upper Paleolithic 3万年前~1万年前]にまで遡る古代の生活様式に根を持って(Furst 1973/74, 38)」いるとされ、最古の宗教の有力候補である。「……シャーマンの関心の焦点が狩りと、狩りの獲物と、その精霊に置かれていることは、動物の仲間たちに憑依し、支配する活動と共に、全体としてシャーマンを儀式的にも象徴的にも狩りに結びつけている。(Guenther 1999, 428)」

3.5.2. シャーマニズムの心性の基本は、「人と動物が、また人や動物を超えて環境のすべての現象が、質的に同じ価値をもつこと(Furst 1973/74, 41)」である。したがって、「動物たちはそれ自身の権利においてパートナーであり自発的行為者(Valeri 1994, 120)」として遇されねばならない

3.5.3. それゆえ、「動物の殺害は、人を殺すことにくらべて、より深刻なものでないとは言えないし、またそれに劣らず危険が伴う(ロット-ファルク 1980、141)」のである。それは、殺すことが「端的に、殺された者からの仕返し、あるいはその代わりにの者からの仕返しを招くから(Valeri 1994, 121)」である。

3.5.4. 「たくさんの熊を殺した者は、熊によって非業の死をとげるだろう、とヤクートは言う。……度はずれたことはなんであれ、神々の注意をひき、そのねたみさえ招きかねない*。(ロット-ファルク 1980、153)」/*注:「このこと[神々のねたみ]は、腕のよすぎる戦士にもやはりあてはまる。あるユカギールの若者は、ラムートの攻撃を受けたとき敵をあまり多く殺しすぎたので、

⁵ 木製の槍が出土している。だが、狩りに役立ったかどうか議論がある。(ハート&サスマン 2007、307)

生き残った敵兵に自分の猪槍を差し出して、自分を殺してくれるようにこう頼んだと言う。《友よ、こちらへ寄れ。もうたくさんだ。おれは君たちの仲間をたくさん殺した。お天道様はおれにお腹立ちだろう。おれを殺してくれ》。(ロット-ファルク 1980、243)」

3.5.5. 互酬的關係は、残忍な行ないに対する報いとしても現れる。「ある動物が《正しくない》やりかたで殺されると、その仲間は、みずからすすんで、あるいは、その《守護霊》の指示に従って、その地を去ってしまう。(ロット-ファルク 1980、152)」つまり「〔狩りでの〕タブーの侵犯が、超自然的な“主(Owner)”ないし“母(Mother)”の指図によりその種類の動物全体が環境から退去することを引き起こすかもしれない。(Furst 1973/73, 45)」

3.5.6. シャーマニズムの心性においては、それゆえ「殺した動物の魂や、その仲間や、その守護霊らのうらみから身を避けるために、動物の殺害にあたって、それにいわば合法的なかたちを整えておく(ロット-ファルク 1980、141)」必要がある。そのために、動物のほうに殺されることを求めて狩人の前に出てきたのだと言いわけをする(ロット-ファルク 1980、143; 同 145) といった虚構が動員される。

3.5.7. また、「動物の死を決するのはあらゆる種類の主、庇護者、護衛者等々(ロット-ファルク 1980、52)」なのであり、「動物たちは、人間をも動物をも凌駕する上位の力の要請や命令によって殺されることがありうるだけなのである。その力は、神々や先祖の霊 shades 等々である(Valeri 1994, 120)」とされる。そこで、「宥めの儀式や神秘的活動は、狩りの獲物や天候を操っている精霊に向けられる(Guenther 1999, 428)」ことになる。

3.5.8. こうして「生命の意味ある形を取り去ることを正当化する(justify)(Valeri 1994, 105)」ことが可能なり、「何らかの利益を生み出すために何らかの生命を儀式化して(ritualize)取り去ること(ibid.)」、つまりは「普通には消費できないものを人間の諸目的のために消費することの権威付け(authorize)(ibid.)」が成り立つことになる(傍点は引用者)。

3.5.9. 殺される相手の苦しみと自らの罪責感、人間にとって虚構ではない。精霊が背後にいて人も動物も支配しているとか、動物は喜んで狩人の前にやってくるのだといった物語は、罪責感を消すための虚構である。それが虚構であることを、狩猟民も自覚している。

3.5.10. 「ヨヘリソンは、殺された大鹿の頭を見つけて、それをかわいそうだとしたために死刑を言い渡された少女の話を報告している。……いけないことは、大鹿に憐憫の情を示したことであった。この憐れみが、大鹿を殺そうと狩人が考えたことや、大鹿が苦しんだことを、ほのめかしてしまっただのである。大鹿は、尊敬されるべき客、みずからすすんでやってくる客として遇される、という虚構〔fiction〕は、あっさり壊されてしまっただのである。この実例から、いかに手のこんだ理屈〔la casuistique〕が立てられるかが分かる。(ロット-ファルク 1980、151 下線は引用者)」

3.5.11. 以上を要約する。浮かび上がるのは次のような構図である。

(1) ヒトは、動物も含む広い範囲の他者に共感する能力を備えるようになる。

(2) ヒトは、自分が傷つけた相手からは報復を受けるという互酬性の認識を、動物も含む広い範囲の他者に適用する能力を備えるようになる。

- (3) ヒトは、肉を得るための意図的な狩りをなし得る段階に達するが、上の(1)(2)の能力のために、動物殺しが人殺し同様に不快な行為と感ぜられる。
- (4) 人と動物の両方が服従する上位の権威が虚構として設けられ、この上位者によって或る動物個体の死が命ぜられる、という物語が組み立てられる。
- (5) 虚構の上位者とのコミュニケーションにたずさわる専門家(シャーマン)が生まれ、その指図に従うことによって、その物語の中ではどういう場合にどういう手続きで動物(仲間)を殺すべきなのか、という一般規則に沿った行為が可能となる。
- (6) 一般規則によって或る特定の暴力だけが権威付けられ、規則に従う安全で正しい生活が可能になる。つまり、道徳的な生き方が成り立つようになる。

4 補足 発達心理学の知見から

- 4.1. 新生児はおとなの顔つきを真似る能力を生得的に備えている⁶。幼児は、6カ月から12カ月で、視線や指さしを手掛りにして他人の注意の目標物を突き止める共同注意の能力を発達させるようになる⁷。さらに、18カ月頃には、動作の外形的な模倣から、動作に込められた意図や目標の模倣に移行する⁸。こうして他人の意図を理解して自分の内に取り込む基本的な能力が形成される。⁹
- 4.2. 2月齢の幼児は母親と情動的なコミュニケーションを濃密に行なっている。4.1の共同注意の能力の一環として、社会的参照(social reference 幼児が新奇物に接したとき親の感情反応を確かめる行動)の能力が12月齢頃に現れてくる¹⁰。恥や罪の意識の原型は、2歳児の行動パターンとして実験的に確認できる¹¹。
- 4.3. マネやゴッコ遊びは、幼児の発達において重要な要素を占める。幼児における器物の使用法の習得は模倣の一種である。器物の使用は、2歳を過ぎる頃に、ゴッコ遊びにおける代替物の使用に推移する¹²。2歳を過ぎる頃に、バタな事実とは別の虚構の設定を適切に取り扱うことができるようになる。ゴッコ遊びは、共同的な虚構の設定の下での推論や身振りとして成立する¹³。
- 4.4. ゴッコ遊びは、他人の心を読み自分を内省する能力(「心の理論」)が発現する基盤になっていると推定される。3歳から5歳にかけて、幼児は、世界について他人が自分と違う偽なる認識(信念)を持ちうること、および自分の認識(信念)も偽になりうること、をうまく扱えるようになる。言い換えれば、他人の心的表象を、自分の信念とは異なるものとして自分の心の中で構

⁶ Meltzoff and Moore 1977; Meltzoff and Moore 1983.

⁷ Scaife and Bruner 1975; Bruner 1983; Butterworth 1994; Butterworth 2001; Butterworth and Jarrett 1991; Tomasello 1995; Tomasello 1999; Tomasello 2001.

⁸ Meltzoff 1995.

⁹ Leslie 1987; Leslie 1994; Nichols and Stich 2003; Perner 1988.

¹⁰ Baldwin 1995; Tomasello 1999; Tomasello 2001.

¹¹ Barrett 1995.

¹² McCune-Nicolich 1981.

¹³ Leslie 1987; Leslie 1994; Wellman and Estes 1986; Perner 1988.

成することができるようになり、同時に、客観的世界とは異なるものとして自分や他人の表象を取り扱うことができるようになる。¹⁴

4.5. 共感の発達、罪や恥の意識の萌芽、虚構の認識と設定、虚構の下での行為の能力、他人の意図の理解と他人の意図にしたがった行為の能力、といった諸能力が、遅くとも5歳頃までにはそろっていくことが分かる。このうち道德の起源に関する本発表の説明に深く関わるのは、他人の心を読み自分を内省する能力(「心の理論」) および、虚構を設定してゴッコ遊びをする能力(フリをすること *pretending*) である。この二つは、チンパンジーに萌芽的には認められるとしても、ヒトほどには発達が認められない能力である。

参考文献表

- 内井惣七 (2009) 『ダーウィンの思想』 岩波新書。
- カートミル, M. (1995) 『人はなぜ殺すか 狩猟仮説と動物観の文明史』 内田亮子訳 新曜社。
- グドール, J. (1990) 『野生チンパンジーの世界』 杉山幸丸、松沢哲郎監訳 ミネルヴァ書房。
- 田村 均 (2008) 「服従と犠牲 柏端達也 『自己欺瞞と自己犠牲』 をめぐって 」 『名古屋大学文学部研究論集』 哲学 54 : 43-78 . (<http://hdl.handle.net/2237/10567>)
- 田村 均 (2010) 「自己犠牲的行為の説明 行為の演技論的分析への序論」 日本哲学会編 『哲学』 第 61 号 : 261-275 .
- ド・ヴァール, F. (1998) 『利己的なサル、他人を思いやるサル』 西田利貞・藤井留美訳 草思社。
- ハート, D. & サスマン, R. M. (2007) 『ヒトは食べられて進化した』 伊藤伸子訳 化学同人。
- ヒューム, D. (1995) 『人間本性論』 木曾好能訳 法政大学出版局。
- フーコー, M. (1986) 『性の歴史 知への意志』 渡辺守章訳、新潮社。
- プラトン (1967) 『ゴルギアス』 加来彰俊訳 岩波文庫。
- ブルケルト, W. (2008) 『ホモ・ネカーンス』 前野佳彦訳 法政大学出版局。
- ランガム, R. (2010) 『火の賜物 ヒトは料理で進化した』 NTT出版。
- ロック, J. (1972-77) 『人間知性論 (一) ~ (四)』 大槻晴彦訳 岩波文庫。
- ロット-ファルク, E. (1980) 『シベリアの狩猟儀礼』 田中克彦、糟谷啓介、林正寛訳 弘文堂。
- Baldwin, Dore A. (1995). 'Understanding the Link Between Joint Attention and Language'. In Chris Moore and Philip J. Dunham (Eds.). *Joint Attention: Its Origins and Role in Development* (131-158), Hillsdale NJ: Lawrence Erlbaum.
- Barrett, K. C. (1995). A Functionalist Approach to Shame and Guilt. In June Price Tangney and Kurt W. Fischer, (eds). *Self-Conscious Emotions: The Psychology of Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. New York: Guilford Press.
- Bruner, J. (1983). *Child's Talk*. New York: Norton and Company.
- Butterworth, G. (1994). Theory of Mind and the Facts of Embodiment. In C. Lewis and P. Mitchell (eds.), 1994. *Children's Early Understanding of Mind* (pp. 115-132). Hove UK: Lawrence Erlbaum.
- Butterworth, G. (2001). Joint Visual Attention in Infancy. In G. Bremner and A. Fogel, (eds.). *Blackwell*

¹⁴ Flavell 1988; Gopnik 1993; Gopnik and Astington 1988; Perner, Leekam and Wimmer 1987; Wellman, Cross, and Watson 2001; Wimmer and Hartl 1991; Wimmer and Perner 1983.

- Handbook of Infant Development* (pp.213-240). Oxford: Basil Blackwell.
- Butterworth, G. and Jarrett, N. (1991). What minds have in common is space: Spatial mechanisms serving joint visual attention in infancy. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, pp.55-72.
- Dewey, J. (2009 [1916]). Force, Violence and Law. In V. Bufacchi (ed), *Violence: A Philosophical Anthology* (11-14), New York: Pelgrave Macmillan, 2009, [orig. *New Republic* 5 (1916): 295-97].
- Dumon, L. (1977). *From Mandeville to Marx*. Chicago: University of Chicago Press.
- Finnis, J. (2002). Natural Law: The Classical Tradition. In Jules Coleman and Scott Shapiro (eds.). 2002 *The Oxford Handbook of Jurisprudence & Philosophy of Law* (1-60). Oxford: Oxford University Press.
- Flavell, J. H. (1988). The development of children's knowledge about the mind: From cognitive connections to mental representations. In J. W. Astington, P. L. Harris, and D. R. Olson. (eds.). 1988. *Developing Theories of Mind* (pp.244-267). Cambridge: Cambridge University Press.
- Furst, P. (1973/74). The roots and continuities of Shamanism. *ArtsCanada*, 184/7:33-50.
- Gopnik, A. (1993). How we know our minds: The illusion of first-person knowledge of intentionality. *Behavioral and Brain Sciences*, Vol. 16, pp. 1-14.
- Gopnik, A., and Astington, J. W., (1988) Children's Understanding of Representational Change and Its Relation to the Understanding of False Belief and the Appearance-Reality Distinction, *Child Development*, 59, pp.26-37.
- Guenther, M. (1999). From totemism to shamanism: hunter-gatherer contributions to world mythology and spirituality. In Richard B. Lee and Richard Daly (eds.). *The Cambridge Encyclopedia of Hunters and Gatherers* (426-433). Cambridge: Cambridge University Press.
- Hare, R. M. (1952). *The Language of Morals*. Oxford: Oxford University Press.
- Hume, D. (2000 [1739]). THN *A Treatise of Human Nature*. Oxford: Oxford University Press.
- Jones *et als.* (eds). (1992). *The Cambridge Encyclopedia of Human Evolution*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kitcher, P. (2006). Ethics and Evolution: How to get here from there. In S. Macedo & J. Ober, (eds). 2006. *Primates and Philosophers* (120-139). Princeton University Press.
- Leslie, A. M., (1987. Pretense and Representation: The Origins of "Theory of Mind", *Psychological Review*, Vol.94, No. 4, pp.412-426.
- Leslie, A. M., (1994). *Pretending and Believing*: issues in the theory of ToMM, *Cognition*, 50, pp.211-238.
- Locke, J. (1975 [1689]). EHU *An Essay concerning Human Understanding*. Oxford: Oxford University Press.
- Lot-Falck, E. (1953). *Les Rites de Chasse*. Paris: Gallimard.
- McCune-Nicolich, L. (1981). Toward Symbolic Functioning: Structure of Early Pretend Games and Potential Parallels with Language. *Child Development*, 52, pp.785-797.
- Meltzoff, A. N., (1995) Understanding the Intentions of Others: Re-Enactment of Intended Acts by 18-Month-Old Children. *Developmental Psychology*, Vol. 31, No. 5, pp.838-850.
- Meltzoff, A. N., and Moore, M. K., (1977). Imitation of Facial and Manual Gestures by Human Neonates. *Science*, 198, pp.75-78.
- Meltzoff, A. N., and Moore, M. K., (1983). Newborn Infants Imitate Adult Facial Gestures. *Child*

- Development*, 54, pp.702-709.
- Nichols S. and Stich, S. (2003). *Mindreading: An Integrated Account of Pretence, Self-Awareness, and Understanding Other Minds*. Oxford: Oxford University Press.
- Perner, J., (1988). Developing semantics for theories of mind: From propositional attitudes to mental representation. In Astington, J. W., Harris, P. L., and Olson, D. R., (eds), 1988. *Developing Theories of Mind* (pp.141-172). Cambridge: Cambridge University Press.
- Perner, J., Leekam, S. R., and Wimmer, H., (1987: 'Three-year-olds' difficulty with false belief : The case for a conceptual deficit', *British Journal of Developmental Psychology* , 5, pp.125-137.
- Scaife, M. and Bruner, J. S. (1975). The capacity for joint visual attention in the infant. *Nature*, Vol.253, 265-266.
- Schneewind, J. B. (1998). *The Invention of Autonomy*: Cambridge University Press.
- Stanford, C. B. (1999). *The Hunting Apes: Meat Eating and Origins of Human Behavior*. Princeton: Princeton University Press.
- Tomasello, M. (1995). Joint Attention as Social Cognition. In Moore, C. and Dunham, P. J. (Eds.), 1995. *Joint Attention: Its origins and Role in Development* (pp.103-130). Hillsdale , New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Tomasello, M. (1999). Having Intentions, Understanding Intentions, and Understanding Communicative Intentions. In Zelano, P. D. Astington, J. W. and Olson, D. R. (Eds.), 1999. *Developing Theories of Intentions: Social Understanding and Self-Control* (pp.63-75). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Tomasello, M. (2001). Perceiving intentions and learning words in the second year of life. In Bowerman, M. and Levinson, S.C. (Eds.). 2001. *Language Acquisition and Conceptual Development* (pp.132-158). Cambridge UK: Cambridge University Press.
- Valeri, V. (1994) Wild Victims: Hunting as Sacrifice and Sacrifice as Hunting in Huauulu. *History of Religions*, Vol 34, No. 1. 101-131.
- de Waal, F. B. N. (1996). *Good Natured*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Weber, M. (1970 [1918/9]. Politics as Vocation. In H. H. Gerth and C. W. Mills (eds), *From Max Weber*, London: Raoutledge, 1970, [org. 'Politik als Beruf', 1918/9].
- Wellman, H. M., and Estes, D., (1986). Early Understanding of Mental Entities: A Reexamination of Childhood Realism. *Child Development*, 57, pp.910-923.
- Wellman, H. M., and Cross, D., and Watson, J. (2001). Meta-analysis of Theory-of-Mind Development: The Truth about False Belief. *Child Development*, Vol. 72, No. 3, pp.655-684.
- Wimmer, H. and Perner, J., (1983). Belief about beliefs : Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13 pp.103-128.
- Wimmer, H., and Hartl, M., (1991). Against the Cartesian view on mind: Young children's difficulty with own false beliefs. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, pp.125-138.